様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　23 年　4 月　22 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：　2008～2011
課題番号：２０３２００９２
研究課題名（和文）　近代移行期北東アジアにおける秩序構想の比較社会史

研究課題名（英文）　Comparative History on the conceptions of social order in early modern Northeast Asia

研究代表者
山田　賢（YAMADA　MASARU ）
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：９０２３０４８２

研究分野：歴史学
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：比較歴史学・北東アジア・国民国家・秩序構想

１．研究計画の概要

（１）研究目的：本研究の目的は、中国大陸・朝鮮半島・日本列島を包摂する北東アジア諸地域を中心的な対象に据えつつ、近代移行期においてそれぞれの社会の内に胚胎された多様な秩序構想と、そのせめぎ合いの果てに「国民国家」とナショナリズムが生成されていく過程を比較史的に検討することにある。すなわち、本研究が目指すところは、「国民国家」とナショナリズムという近代の枠組みを、単に外在的な所与と考えるのではなく、近代移行期の基層社会の内側から育まれた秩序構想を汲み上げつつ成立した「生成」の観点から捉えようとする点にある。

（２）研究方法：本研究は次に示す方法により所期の目的を実現する。第１は、中国・朝鮮・日本における近代移行期の地域社会に出現した多様な秩序構想を実証的に考察し、そのような地域レベルの秩序構想と、国家レベルの秩序構想とを架橋することである。第 2 は、それぞれの地域に密着した実証研究を進めつつ、北東アジア近代移行期における「国民国家」の生成過程を世界史的な観点から記述するための仮説を提示することである。以上の作業を通して、各国史の枠組を揺さぶり、北東アジア各地域の歴史を、「世界史」的な記述へと開いていくことも本研究の目指すところである。

２．研究の進捗状況

（１）実施体制：本研究の遂行に当たって、連携研究者と国内外の研究協力者を加えた全メンバーを、調査対象地域の別に基づく３つのユニット―日本列島基層社会研究班、北東アジア比較研究班、ユーラシア広域研究班―に組織し、それぞれが自己のフィールドにおいて調査を実施するとともに、海外の研究機関と連携しつつ研究を進めた。

（２）国際交流：2008 年度は研究代表者山田賢が、浙江工商大学日本文化研究所において近世日本の漢籍輸入に関する講演を行うとともに、中山大学において開催された中国社会史学会にて報告するなど、中国の研究者との交流を進めた。2009 年度には、国際シンポジウム「「北東アジア史」―その意義と問題点―」を開催し、本研究の連携研究者である南開大・李卓日本研究院院長をはじめとする中国・韓国・アメリカ等のアジア研究者を招聘し、「北東アジア」という枠組の有効性について議論を行うなど、国際的な交流の中で北東アジアの近代移行期を考察した。

（３）国内交流：国内においてはとくに日本近世史研究者との研究交流を活発に実施した。研究代表者山田賢が共著者として参加した『東アジアの政治文化と近代』(2009 年)、『国民国家の比較史』(2010 年)、『世界戦争と改造』(2010 年)、『身分論をひろげる』(2011 年)などはそのような研究活動の成果である。

（４）中間的総括：これらの研究成果を通して明確になってきたのは、これまでのように国民国家をいち早く形成して近代化した日本と、その形成が遅れた中国等他のアジア地域という対比モデルは成立しないということである。むしろ、それぞれの地域が抱えていた近世社会の前提条件と課題の相違ゆえに、同じように国民国家化が進められたにもかかわらず、その様相が異なって見えたに過ぎないのではないか、というのが現時点における見通しである。

３．現在までの達成度
　②おおむね順調に進展している。
（理由）
　比較史の方法を中核に据えて北東アジアの近代移行期を考察しようとする本研究において、国際研究交流―とりわけ中国・韓国を初めとする北東アジア諸国との研究交流は欠かせない。また、日本国内においても、日本史研究者、朝鮮史研究者との共同研究や討議を当初から企画していた。これらの計画は順調に遂行されており、かつ、国際研究交流・国内研究交流の成果に基づく研究業績も確実に蓄積され、一定の見通しを得るに至っている。従って、本研究は所期の目的を達成すべく順調に進展していると評価できる。

４．今後の研究の推進方策

　本研究は 2008 年から 2010 年において、国際的・国内的なネットワークを広げながら順調に進展しているため、最終年度の成果の取りまとめに向けて十分な基礎が固められている。その成果の一端は研究業績として発表すべく準備を整えている。なお、最終年度には千葉大学にて国際シンポジウムを開催する予定であったが、昨今の状況により海外からのゲストを招聘しにくくなっている。早急に決断を下す必要があるが、この状況が続くと見込まれる場合には、対応策として、研究代表者が海外の連携研究者を訪問し、海外にて予定よりも規模を縮小した研究会を開催することも考えており、総体として本研究は予定通り遂行できる見通しは立っている。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）
①山田賢「東アジアの近世―清代中国の秘密結社について―」、七隈史学、13 号、1-7、2011、査読無
②山田賢「日本近世における漢籍輸入と「経世」思想」、日本思想文化研究、2 巻 2 号、8-25、2009、査読有
③山田賢「戦乱と記憶―『仕隠齋渉筆』に見る清末社会―」、史朋、42 号、1-11、2009、査読無
④岩城高広「植民地文書からみた 19 世紀末のビルマ人地方有力者像」、人文研究（千葉大学）、38 号、141-156、2009、査読無
⑤秋葉淳「オスマン帝国末期リビアにおける司法制度のオスマン化」、東洋学報、90 巻 2 号、27-54、2008、査読有

〔学会発表〕（計 10 件）
①山田賢「東アジアの近世―清代中国における人の移動と秘密結社―」、七隈史学会、2010 年 9 月 25 日、福岡大学
②山田賢「革命イデオロギーの遠い水源―清末の「救劫」思想をめぐって―」、中国社会文化学会、2010 年 7 月 10 日、東京大学
③山田賢「近代中国における「宗族」と地域秩序」、名古屋歴史科学研究会、2010 年 5 月 8 日、名古屋大学
④久留島浩「近世後期の地域社会と民衆運動」、アジア民衆史研究会、2008 年 11 月 29 日、明治大学
⑤山田賢「地域与記憶―従丁治棠的《仕隠齋渉筆》看清末四川地方社会」、中国社会史学会、2008 年 11 月 15 日、中山大学（中国）

〔図書〕（計 12 件）
①深谷克己他編、山田賢、趙景達他共著『身分論をひろげる』、吉川弘文館、2011 年、100-153
②趙景達他編、趙景達、山田賢他共著『世界戦争と改造』、岩波書店、2010 年、1-40、184-202
③久留島浩・趙景達編『国民国家の比較史』、有志舎、2010 年、464
④安田常雄・趙景達編『近代日本の中の「韓国併合」』、東京堂出版、2010 年、266
⑤深谷克己編、山田賢他共著『東アジアの政治文化と近代』、有志舎、2009 年、38-57